新書紹介

現代の公共問題と市民 平均的市民の政治的成熟

足立忠夫著

ぎょうせい　A5版　二、三〇〇円

1　本書は、49号で本欄で紹介された『行政と平均的市民』の続編として出ている。政治や行政が持つ権力の正統性を〝だれに〟、〝何に〟求めるべきか。正統性の担い手となる市民とはだれのことか。そういう市民のいかなる価値意識が正統性をもつのか。

2　現代社会には、自由社会とか、管理社会、階級社会、価値多元化社会、脱工業化社会といった無数のレッテルが貼られている。こうしたレッテルは人間の意識に注目したものであり、社会の矛盾する側面を夫々表現している。いろいろなレッテルが、相互に矛盾・対立していることから見られる如く、現代社会は破調的ディレンマ社会である。人間の意識という側面においては、変化する社会であると同時に変化しない社会である。年令・年功・地位の序列に関する独特の意識は不変化の例である。組織における不変化は、独自社会的性格、下級管理職の重要性、習俗的家父長的規律、私的家の論理の貫徹などに見られる。これらは、タテ割行政や閥の根源であり、公私混淆、〇〇一家意識などと言われるものとなる。ところで、市民生活の領域のうち、公的な市民的かつ政治的領域といったものは次第に広がっており、国家の活動領域は異常な勢いで拡大している。憲法という〝全市民合意のタテマエ〟を根拠にして、私的な、個人的な問題が公共問題に転化してゆく時代でもある。公共問題は、直ちに国や地方公共団体が解決にあたるべきものであるとはいえない。政府の責任や守備範囲は、今日の社会の現実の理念に照し合せて厳密に検討されなければならない。公共問題はディレンマに陥っており、一方の解決が他方の解決の障害になることが少くない。こんにちの公共問題の解決には何が必要か。際限のない対話は問題の解決を収拾つかないほど困難にする。行政の指導主義が重要であると同時に、最少限の中央集権も必要と思われる。公共問題にとって不毛なのは、過剰なイデオロギー的対立である。これを減少させるには、全市民的合意の理念を現実の政策にまで媒介する客観的、具体的標準を開発する必要がある。市民相互あるいは市民と行政の紛争は、平均的市民を規準として成立する優先順位に関する一致によって、あるていど解消する。公共問題のもつディレンマを討論によって克服することも有効な手だてである。しかし、討論を避けようとする風潮もあるので、市民ことごとくが、討論の当事者として成熟することが求められる。ディレンマと対決しそれを認める態度が大切である。自己を凝視し、自我を確立し、ディレンマ挑戦市民にまで成熟することが公共問題の真の解決をもたらすだろう。

3　以上が本書点描である。日本人の意識に関する考察は、ややくどい所もあるが、一々思い当ることばかりだ。リベラリストとしての著者は、歯に衣をきせぬ鋭い批評を随所で展開する。大学人の言論の自由について「日本の大学では、大勢に順応する自由と研究を放棄する自由と空理論を説く自由がある…」と述べ、公務員意識に触れて「日常的市民生活においては高い道徳律に従う男が、役所という機構に入るとたんに低い道徳律に影響されて非行に走った」例は特異なものではないという指摘は耳がいたい。また、マスコミの政治的権力性にふれて「表むきは、公務員や警察の悪口を叫ぶが、裏では表の作用と矛盾する役割を果している」などと縦横に斬ってみせる。

公共問題解決のための宝刀を授けてくれるものではむろんない。しかし、公共問題に面と向ったときの自治体職員の心構え、ディレンマにじっくり対決し苦悩の中から解決を生んでいく方向を示唆ており、日常とかく、小じんまりと器用に仕事を処理しがちなわれわれに、反省と勇気を与えてくれる本だと思う。

著者は、かつて本誌に「公務員の気質」という小論文を掲載した（37号・特集「地方公務員の職業倫理」）。いろいろな論稿は、雑誌などで読まれた人も多いだろうが、本書は著者のライフワークのシリーズの一つである。地方自治にも豊かな経験を持たれており、本書の続編が待たれるのである。

〈建築局宅地第一課事務第一係長　上野　欣計〉